

ふくらく通信

2013年 第3号 7月17日発行
総号数 63 発行人 菅野香織

(残存する物の記憶) 2012年9月公表(加筆再編集)

南三陸町

残存する物の記憶
志津川

2011年10/26撮影
← 解体前の志津川病院周辺

津波に船が乗りあがっていた。川病院。右岸にあたる志津川病院。右岸に船が乗りあがっていた。病院の奥には「サンポート」(日用品・食品・食堂を含む商業施設)と、「高野会館」(冠婚葬祭・会合場)も見える。



2012年9/5撮影



2012年9月、病院もサンポートも解体され、手前や隣に建物が無くなり、高野会館だけが残っている。

2012年6/6撮影



2012年6月、東側から解体の始。また志津川病院。乗りあがった船は、まだそのまま。左端にシーツが掛けられた建物と重機。サンポートの一部が見える。

町役場の防災対策庁舎は、震災直後から骨組みだけになって残っていた。

多くの命が犠牲となったことから、地元では解体を望む声が出た一方で、震災遺構として保存したいとの声も上がる。

人心が揺れ動く中。

防災庁舎は黙って傷んだ町を見守っている。



← 2011年10/26
「震災が起きた」と呼ばれる町の破片が背後に積まれている



現在 →
(2013年5/21撮影)

足元に花が手向けられている

防災庁舎で犠牲になった方も多いが、波をかぶりながら声を掛け合って支え合い、屋上で懸命に手すりにつかまり、生き残った人々もいる。

みんなを助かりたかったろう。なのに、どうにもできぬ窮地に陥ってしまった。生き残った人の心も、どれほど痛いかな。

当時、町の記録を担当していた職員が津波の状況写真を撮った。(南三陸町のホームページで公表)

その記録は、辛い記憶でもある。それでも、命を尊ぶからこそ、後世に残そうと思いたつ。

今も、ふかから生き残る人々と、これからの町のために、津波に襲われながら残存するものは、本当に本当に大切な町の記憶ではなろうか。

痛みを伴う遺構も、写真も、どれほど大事なことを後世に教えることが、そこに生きた人々の努力。

たくさん喜怒哀楽が日々生み出される町があったこと。僅かの間に町ごと持っていく津波のこと。助かった人々の支えあい。

それを、私には心に留めておきたい。後に続く人々にも知らせたい。

一瞬でも、誰か必ず心に留められた存在なのだ。気付いて欲しいから。



← 2011年10月
八幡川と志津川漁港付近

← 現在(2013年5/21撮影)



(2012年9月公表記事、加筆再編集)